

# リチャード・ライト『アメリカの息子』再読(III)<sup>1</sup>

——『アメリカの息子』におけるエンパシーの検討——

## Reconsidering Empathy

### in Richard Wright's *Native Son* (III)

田島 健太郎

(Kentaro Tabata)

#### はじめに（あるいは承前）

前稿<sup>2</sup>で確認した通り、リチャード・ライトの『アメリカの息子』（以下 *NS* と略記）Book II の終盤で警察の包囲網に追い詰められ絶望したビガー・トーマスは、煙突という無機物を対象にエンパシー的同一化の想像力を働かせることで、「死の欲動」を発現させていた。また、このエンパシー的死の欲動は、逮捕された後 Book III の冒頭で拘置所に拘留されている段階では、バートルビー的な、いかなる（人間的）関係性をも拒絶する（が人種主義的社会では黒人にとって継続不可能な）姿勢としてあらわれていた。しかしながら、その後、ビガーは獄中でジャン・アロンと再会した際に、ジャンの告白が示す「友人宣言 (a declaration of friendship)」に「人間性 (humanity)」(268)<sup>3</sup>を垣間見たように感じ、人間性への確信と期待を（取り戻す、というより、生まれて初めて）獲得することになる。

*NS* の最終巻 Book III は、ビガーの死の欲動（絶望）と人間性への期待（希望）という双極的なふたつの感情状態のあいだの振幅が一番の読みどころであることは、特に説明を必要としないだろう。しかしながら、難しい（というかあまりに単純で見えにくい）のは、ビガーがこの振幅を経験する過程で特に精神的な成熟や成長を見せるわけではないという点である。前々稿で確認したように、ビガーには成熟や成長する素地となる意志や精神自体が幼く貧弱であるよう作者によって意図的に設計されている。そのような主人公が何度か人間性への希望を持つとうとするがその都度失敗し深い絶望へ振り戻される姿を、Book III の読者は繰り返し目撃することになる。それゆえ、振幅の幅や落差は大きいものの、双極がたがいに切り替わるだけの反復の物語展開——しかも主人公が成長する精神的並びに時間的余裕もなく、物語の結末も主人公の死刑ないしは

良くて終身刑とあらかじめわかっている物語展開——は、プロットの観点から言えば、どうしても退屈な印象を免れ得ないし、「逮捕されてからの部分がやや長い」（平石 515）と評されても仕方がない。

ただし、エンパシーの観点から見て興味深いのは、周りの他者の人間性についてビガーが覚える絶望と希望のあいだの振幅が、比喩的に言えば、0 か 100 かの両極端のあいだの繰り返しというよりも、0 と 1 とのあわいを行き来する微妙なしかし根源的な反復であるという点である。すなわち、この反復においては、ビガーの精神的成熟や成長という発展的な問題というよりも、彼が人間性への確信を持つのを可能にする要因は何かという基盤的な問いがしつつ繰り返して問われているということだ。これは、エンパシーの観点から見ると、Book III のビガーの振幅においてはエンパシーの条件的基盤が根源的に検討されている、と言い換えることができる。というのも、（前稿でも同様のことを論じたが）**エンパシーの発動条件には、他者の人間性を認めるという理論的契機が前提として必要であるから**だ。マーサ・C・ヌスバウムが説明するように、（サディストですら発揮できるし悪用すらできる）エンパシーという心的態度の道徳・倫理的含意がどうであれ、エンパシー的に他者の経験を再構成するということは、その他者の存在のリアリティや人間性を少なくとも認めているということであり、その意味ではエンパシーは他者の人間性を全く認めず完全にモノや手段として扱う態度とは区別される。（Nussbaum 333-335）<sup>4</sup> **エンパシー的に他者の経験を再構成するということは、理論的には、再構成されるべき人間性が他者に存在するとまずは確信していなければいけない**。つまり、Book III で起こっているのは、エンパシーの前提条件自体のラディカルな吟味である、ということだ。エンパシーのあらわれがさまざまに吟味された Book II（前稿の内容）から、Book III にくると、エンパシーを可能するものは何かという根源的問いが繰り返し吟味されるようになる。本稿ではここを見ることになる。

本稿の目的は、ラディカルに問われるこのエンパシーの前提条件をまずは Book III のビガーのふるまいにそって検討することにある。その問われ方がテキスト的には反復的である以上、本稿の観察も、似たような論点を異なる観点から執拗に反復的に扱うことになるだろう。その観点とは、エンパシーと脱自己中心化の関係、エンパシーと人間性への確信の関係、エンパシーと自己の個別性の問題、エンパシーと自己表現意欲の関係、そして（読者と）作者のエンパシーの在り方の問題である。（後者三つは次稿で論じる。）

### 3.7. 脱自己中心化とネガティブ・ケイパビリティ

我われ読者が小説の主人公に感情移入しているとき、我われは自分自身の直接的な欲望や関心をいったん度外視して自ら積極的に虚構世界に身をゆだね、対象主人公の欲望や関心を再構成することを優先し、それを自分の意識の中心に据えている。これから起こるだろうことの想像的シミュレーションを“planning process”と呼びながら、作家であり心理学の研究者でもあるキース・オートリーはフィクションへのエンパシーのありようを以下のようにまとめている：

Empathetic identification with a character occurs when, in response to the writer's invitation, the reader puts aside her or his own goals and concerns, inserts the goals and plans of the character into his or her own planning processor, and mentally enacts the plot. The emotions that then occur are empathetic emotions in relation to the plot's plans, actions, and outcomes, not the character's but the reader's own. (Oatley 177-178)

文章の最後の部分—“not the character's but the reader's own”—を除けば<sup>5</sup>、この記述はそのまま（フィクションの登場人物に対するものではなく）現実の他者に対するエンパシーのありようにも当てはまると考えてよいだろう。すなわち、エンパシーが立ち上がる前に、エンパシーの主体は自分「自身の目標や関心をわきにおいて」しませなければいけない。エンパシーに求められる、他者の内面を優先するこの態度は、フィクションの場合においては現実逃避としてネガティブに捉えられることも多いが、現実の他者相手の場合には利他的な構えを招き入れる行為として捉えられ、ある種の道徳的・倫理的態度につながりうるエンパシーのポジティブな面として称揚されることも多い。そのどちらにしる、現在の議論において強調したいのは、エンパシーの他者優先的な構えではなく、むしろ自己の欲望や関心を劣後的にわきにおく脱自己中心化的な構えの方である。

自分自身の欲望や関心をわきにおくということは、ある意味で、自己を滅却することであり、かりそめにも自己を否定することでもある。前稿で取り出したビガーのエンパシー的死の欲動は、この点で別の意味を帯びることになる。すなわち、死の欲動を経ることで初めてビガーは真正にエンパシーの発動条件を満たすことができたということである。確かに、これは奇妙な道筋ではある。というのも、これまた前稿で確認したことだが、エンパシーの前提条件として、

エンパシーの主体はまずもって「自分には自分だけの内的経験がある」こと、つまりある程度の輪郭を伴った自己の内面の確立が要請されるはずだったからである。<sup>6</sup>しかし、いま議論しているのは、同じエンパシーの前提条件として自己否定が要請されるということになるからである。すなわち、Book II から Book III のビガーのエンパシー的想像力の変遷が教えてくれるのは、エンパシーが十全に発揮されるためには、まず自己の内面を確立したのちにその自己の内面を否定するという、いわばちやぶ台返しのプロセスが必要であるということである。

このエンパシー的な他者優先の自己否定は、近年「ネガティブ・ケイパビリティ (negative capability)」という用語で議論されている概念に限りなく近づく。ネガティブ・ケイパビリティという用語は、もともとジョン・キーツの私的な手紙の中で初めて提出されたものだが、作家としてかつ精神科医としてこの概念の重要性を訴える帯木蓬生のかみ砕いた言い方を借りれば、この能力は「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」、ないしは「性急に証明や理由を求めず、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」(共に帯木 3) を指す。ここで(専門書ではなく)わざわざ帯木の言葉を借りたのには、さまざまに重要な意味があるからだが、それについては追々つまびらかにしてゆくとして、まずは彼が作家の想像力と精神科医の治療を引き比べながらネガティブ・ケイパビリティを説明している箇所を、多少長くなるが引用しよう：

医師になる道を歩んでいたキーツは、途中で詩人になる道を選びました。キーツにとって、医学は詩作と対極の位置にあると思えたからでしょう。詩人が、自らのアイデンティティを消し去って、深く対象の中にはいり込むのに対し、医学は既に確固たるアイデンティティを獲得しており、明らかな目的と手段で患者に相対するからです。

ところが医学でも、精神医学は特殊な位置にあります。簡単に言えば、さしたるアイデンティティも、確実な目的も治療法も手にしているとは思えません。詩人と精神科医は、違いよりも似た側面が多いのです。

作家は物語中の主人公を、自分の頭で創り出しはするものの、100%責任をもってその主人公を動かしていくかと言えば、そうではないのです。主人公が自分で動いていくので、作家はそれを追うだけの存在になります。だからこそ、前に述べたように遠い先までは見通せないのです。

精神科の治療も、これと類似しています。患者さんは千差万別であって、誰ひとりとして同一人物はいません。同じ診断名であっても、人となりと置

かれた環境は違っています。教科書や治療指針はあっても、大まかな道筋を示すだけで、マニュアルの域にも達していません。精神科医はだからこそ何とかなんげに工夫し、患者と相談しつつ道を歩いていくしかないのです。

悪く言えば五里霧中、少しましな言い方をすれば、二人で月の光の下、岸の見えない湖をボートに乗って漕ぎ進めていくようなものです。オールを漕いでいるのは患者さんの場合もあるでしょうし、治療者が患者さんの指示でオールを漕いでいる場合もあるでしょう。

作家と精神科医という二つの仕事、私の中で矛盾せず、ひとつに溶け合っている理由は、以上の事情があるからです。患者さんへの接し方と、自分が創り出した登場人物への接し方が、瓜二つなのです。何事も決められない、宙ぶらりんの状態に耐えている過程で、患者さんは自分の道を見つけ、登場人物もおのずと生きる道を見つけて、小説を完結させてくれるのです。(帯木 149-150)

この箇所から我われが学べるのは、(虚構と現実の違いは有れど)他者を前に自らの「アイデンティティ」を押しつけず、その他者に場の主導権を進んで譲り渡すような他者優先・自己劣後の態度が、作家と精神科医の両職業で求められるネガティブ・ケイパビリティのカギとなっている点である。それは、よりかみ砕いて言えば、自分のことは後回しにして、まずは他者の話を粘り強く聞く姿勢だと言ってよいだろう。そして**ネガティブ・ケイパビリティのこの、いわば、脱自己中心化作用が、十全なエンパシーの前提条件になる**ことは、それほど説明を要しないだろう。帯木も「共感が成熟していく過程に、常に寄り添っている伴走者こそが、ネガティブ・ケイパビリティなのです。ネガティブ・ケイパビリティがないところに、共感は育たないと言い換えてもいいでしょう」(帯木 240) と言う。

Book III においてビガーはネガティブ・ケイパビリティを使って他者の話を聞き、自分の欲望や関心をわきにおいたかたちで他者の内面を理解しようと努めることになる。確かに、エンパシー的の欲動経路で自己否定に向かうビガーの身振りは、ネガティブ・ケイパビリティ的な脱自己中心化や他者優先の姿勢と異なる部分はある。ネガティブ・ケイパビリティにおいては、上記引用箇所を再び例にとれば、作者>登場人物や治療者>患者のように、権力勾配のある関係性において上位の、余裕のある側の者が自己を自重し、より余裕の程度が小さい、下位の位置にいる相手を優先させているのに対し、ビガーの場合において自己を否定しているのは、人種政治的ないしは法治社会的権力勾配の下位に位置している彼自身の側である。また、ビガーの自己否定も、自己を譲り

渡すというような自己犠牲的なものではなく、他者との関係性を拒絶するような自己破壊的性質のものである。しかしながら、勾留されており身体的に他者の面会等を回避できず話を聞かざるを得ない（が一方で自分から話すことは求められたとき以外自由にはできない）こと、死の欲動からくる自暴自棄や自己卑下により自己の欲望や関心を優先するような心持ちではないことなど複数の外的要因によって、ある意味で状況的にネガティブ・ケイパビリティの発揮に近い態度を取らざるを得ないのもまた、物語の流れから明らかである。

そのように考えてみれば、Book IIIの全体を見渡してみると、ナラトロジー的には依然として三人称の語り手がビガーに内的焦点化して語られてはいるものの、我われ読者がそこで読む中心は、ビガーの内面ではなく、むしろビガーの意識にこだまする周りの登場人物たちの声であることに改めて気づくだろう。看守との些細な会話から始まり、インタビュー記事を含む新聞言説、ハモンド牧師の説教、ジャンの告白、マックスとの会話、バックリーからの詰問、ドルトン夫妻、家族や友人たち、群衆、(おそらく)社会学専攻の黒人大学(院?)生をはじめとした他の囚人たち等々の声をビガーはひたすらに聞く。もちろん、これら登場人物たちは互いに話したり議論したりするし、それらの声のこだまの集大成が法廷シーンであることは言うまでもない。しかも不思議なことに、同じく法廷シーンで最も顕著だが、往々にしてこれらの人物たちが話している最中、ビガーの内面はあまり描かれず、我われ読者もこれらの声が直接話法で語られるのを読むことになるので、ビガーの内面はテキスト的にも他者の声に主導権を譲ってしまっていると言え、実際的に、テキスト自体がビガーならびに読者にネガティブ・ケイパビリティの発揮を強いている。

ビガーのネガティブ・ケイパビリティの高まりが最も見えやすいのは、本稿冒頭でも指摘したジャンの告白シーンである。

Bigger stiffened as Jan walked to the middle of the floor and stood facing him. Then it suddenly occurred to Bigger that he need not be standing, that he had no reason to fear bodily harm from Jan here in jail. He sat and bowed his head; the room was quiet, so quiet that Bigger heard the preacher and Jan breathing. The white man upon whom he had tried to blame his crime stood before him and he sat waiting to hear angry words. Well, why didn't he speak? He lifted his eyes; Jan was looking straight at him and he looked away. But Jan's face was not angry. If he was not angry, then what did he want? He looked again and saw Jan's lips move to speak, but no words came. And when Jan did speak his voice was low and there

were long pauses between the words; it seemed to Bigger that he was listening to a man talk to himself.

“Bigger, maybe I haven’t the words to say what I want to say, but I’m going to try.... This thing hit me like a bomb. It t-t-took me all week to get myself together. ... (266)

なかなか話し始められないジャンに対して不用意に機先を制しようと話しかけるでもなく、息遣いや唇のかすかな動きにまで細やかな注意を注ぎながら辛抱強く待ち、ジャンが話し始めてもその言葉はたどたどしく吃音的にならざるを得ないところを口も挟まず聞き届けるこの場面のビガーは、図らずもネガティブ・ケイパビリティを発揮してしまっている。

加えて、ここでビガーがジャンの口から聞き出すのは、恋人を殺害しただけでなくその罪をなすりつけようとした自分に対する恨みや非難のこもった「怒りの言葉 (angry words)」ではなく、ビガーの境遇にエンパシー的に寄り添う「友人宣言」であり、そこにビガーは他者が彼に寄せる「人間性」を「生まれて初めて」「リアリティ」をもって感じ取る。

Bigger understood that Jan was not holding him guilty for what he had done. Was this a trap? He looked at Jan and saw a white face, but an honest face. This white man believed in him, and the moment he felt that belief he felt guilty again; but in a different sense now. Suddenly, this white man had come up to him, flung aside the curtain and walked into the room of his life. Jan had spoken a declaration of friendship that would make other white men hate him: a particle of white rock had detached itself from that looming mountain of white hate and had rolled down the slope, stopping still at his feet. The word had become flesh. For the first time in his life a white man became a human being to him; and the reality of Jan’s humanity came in a stab of remorse: he had killed what this man loved and had hurt him. He saw Jan as though someone had performed an operation upon his eyes, or as though someone had snatched a deforming mask from Jan’s face. (268)

ここでジャンがビガーに見せた「人間性」は、実はエンパシーの発現である。ジャンはビガーに対して「君に同情しに来たわけではない (I didn’t come here to feel sorry for you)」(267) と言い、彼のエンパシー的寄り添いが（ドルトン夫妻に主に象徴される）構造的人種主義を温存するシンパシーの同情とは異

なることを主張しつつ、白人として構造的な人種主義に無自覚に加担していた自分の罪を自覚していることを示し(同上)、恋人のメアリーを殺された苦しみを奴隷制度下で無理やり家族を奪われた黒人たちの嘆きと引き比べることで人種主義的社会に生きる黒人たちの苦しみに理解を示して(268)、ビガーの殺人やその後の隠蔽工作が人種主義的環境に由来する「憎しみ」に端を発したものであることを理解したうえでビガーに「自分を憎む権利 (the right to hate me)」があると認める(267)。ビガーをひとり人間として捉えてくれるジャンのエンパシー的寄り添いの言葉を、ネガティブ・ケイパビリティ的態度でビガーが聞き入れるこの場面は、向き合う二人の間のエンパシーが互酬的になるような、本作では(マックスとの問答シーンと並んで)エンパシー的ふれあいの理想状態に最も近づく奇跡的なシーンである。<sup>7</sup> その意味で、ジャンは、Book Iであらわれたエンパシーの理想的体現者メアリー<sup>8</sup>の後を継ぐ登場人物である。

ジャンがここでビガーに示したエンパシー的「人間性」の内実については後で別の論点から詳述するに任せて、ここではそれがその直後にビガーへ(おそらく無意識的に)及ぼした効果——すなわちネガティブ・ケイパビリティの發揮ないしは脱自己中止化作用——をしてみることにしよう。ここではこの作品中で最も小説的に優れた、ビガーと家族の対話シーン(274-280)を取り上げる。ジャンの告白を聞き入れた後、ビガーのもとへ母を始めとした家族や友人たちが訪れる。はじめは、白人たちの衆目を集める中で感情を憚らず露わにする母たちに思いを馳せて「憎しみと恥辱 ([h]ate and shame)」(275)がない交ぜになった心持ちに陥るビガーだが、自分のせいで大きな影響を被っているにもかかわらず自分を気遣ってくれる家族たちの声を聞くに及び、ビガーのエンパシー的想像力は、自己中心的なエンパシー的想像力から、自己のことは一旦わきにおき他者の視点から物事を眺める他者本位のエンパシー的想像力へとつかの間跳躍する。

“How you l-l-like them sewing classes at the Y, Vera?” [Bigger] asked.

Vera tightened her hands over her face.

“Bigger,” his mother sobbed, trying to talk through her tears. “Bigger, honey, she won’t go to school no more. She says the other girls look at her and make her ’shamed. . . .”

He had lived and acted on the assumption that he was alone, and now he saw that he had not been. What he had done made others suffer. No matter how much he would long for them to forget him, they would not be able to. His family was a part of him, not only in blood, but in spirit. (277)

「自己中心的なエンパシー的想像力」とは、「自己本位の視点取得」によるエンパシー的想像力のことである。ここでは詳細に紹介している余裕はないが、以前まとめた哲学者エイミー・コプランの理論の説明を借りれば<sup>9</sup>、「自己本位の視点取得」というのは、対象となる他者の視点に立ってその状況を想像した時に、「自分は」どうするかということ想像してしまう視点の取り方（田島「小説のエンパシー理論Ⅰ」26）である。別の用語で言えば、自己の内面を他者のそれに「投影（projection）」するようなエンパシー的想像力のことである。つまり、他者の内面を、自分の内面の延長（ないしは比喩）として想像するエンパシーのことである。こうして考えてみれば、前稿で検討したビガーのエンパシー的想像力は、その端緒に「自己の「内面」の自覚」から類推的に「他者の「内面」の確信」へと至る道筋をたどったが、これは明らかに「自己中心的なエンパシー的想像力」であり、その意味で、Book II におけるビガーのエンパシー的成長は押しなべて独我論的な「自己中心的なエンパシー的想像力」であったと言ってよい。

それに引き比べると、上記ブロック引用のシーンにおけるビガーは、他者（母）の声や他者（妹ヴェラ）の声にならぬ声に耳を傾け、自分の行動が家族たちに浅からぬ影響を与えていることを自覚し、刹那的な点は否めないし非常に微妙で繊細なかたちだが確実に、脱自己中心的に初めて他者（家族たち）の視点に立って自分自身のことを見つめている。ひいては、このシーンの終わりに、母から祈るように言われると、キリスト教を信じていないどころか嫌悪しているにもかかわらず、母の限界（＝宗教）を受け入れ最低限それを尊重し、家族とともに形だけは祈るふりをして母を安心させる、という利他的行動のきざはしすらビガーは見せる。（278）脱自己中心化作用は、ネガティブ・ケイパビリティの発揮を強制される勾留状況でなければ、そしてビガーをひとりの人間として「人間性」をもって接してくれたジャンとのやりとりがなかったならば、発現しなかっただろう。

### 3.8. エンパシーと人間性、あるいはエンパシーのモダニズム的陥穽

ではジャンがビガーに見せてくれたその「人間性」とは何であろうか？この「人間性」とはこの作品におけるエンパシーに大きくかかわる観点なのだが、あまりに手あかのついた大きな言葉なので一般論に頼らず、まずはできるだけ作品に沿って考察するのがよいだろう。2 頁前のブロック引用の箇所（ジャンの告白シーン）に戻ると、ビガーがジャンに見出している「人間性」とは、

(利己的ではない動機にもとづいて、ないしは自己犠牲をいとわず他者のために行動する) 利他的な主体性、さらに、(属性やステレオタイプによらず) 他者をひとりの個別の個人として接する態度であると想定できる。特に重要なのが後者である。また、そこから「互酬的」なエンパシーを取り出したのと同様に、この「人間性」の発揮＝認識も互酬的であると言える。すなわち、**他者が自分の中に「人間性」を認めてくれるからこそ自分も相手に「人間性」を認めることができるし、その逆に、他者に「人間性」を認めるからこそ相手も自分に「人間性」を認めてくれる、という互酬性**である。その互酬性ゆえにそれはきれいなかたちでは見えづらく、上記ブロック引用箇所(ジャンの告白シーン)においてもその見えづらは当てはまるが、それでも、ビガーがジャンを「不気味にそびえたつ白人の憎悪の山から身を引きはがして」自分の前に存在する「白い岩のひとつかけら」(“a particle of white rock had detached itself from that looming mountain of white hate”)として、すなわち「ひとりの人間」(“a human being”)として受け止めることができたのは、スカレットが主張するように、同じように苦しんだジャンがビガーをひとりの人間として見てくれた(Skerrett 39) ことと互酬になっている。予断なく性急にビガーの非を咎めたることをしないばかりか自らの非を進んで認め、黒人であるビガーの前で虚勢を張ることなく自らの弱さをさらけ出すことも厭わず、ビガーの個人的事情とそれを取り巻く政治社会的文脈を勘案してくれるジャンは、ビガーの「人間性」を認めることでビガーに他者の「人間性」を認める契機を与えてくれている。(同様のことがマックスとの会話でも起こっているのは明白だが、こちらは次稿で別の文脈で触れたいので当座は触れないでおく。)

「目の前の他者をひとりの人間として扱う」という、(もちろん我われの日々の人間関係においては基盤的に重要な姿勢だが) それだけでは特に目新しくもなく月並みでしかない「人間性」の概念に紙面を費やしたのは、もちろんビガーが(そして作者ライトも)この点にこだわっているだけでなく、そもそもエンパシーという事象自体においてそれが重要なポイントであるからだが、意外にも、あまりに当然すぎるからか、(文学研究は言うまでもなく議論の主戦場である学際的領域においてさえ)エンパシーが議論される際にこのポイントに十分な留意を払っている論者は卓見のかぎりいない。しかし、私見では、このせいで、近年さまざまな領域で議論されているエンパシーというもともと輪郭が曖昧な概念に対して、不必要に厳密な定義づけが試みられているようにも思える。

エンパシーが議論される時、その概念的輪郭を描こうとする場合には、往々にして、シンパシーとの差異に着目されることがもっとも多い。エンパシーとシンパシーとの差異についても、論者の間にさまざまな論点の違いがある

ので事態は混迷の様相を呈している。本論においても、前々稿でこの区分けをあいまいに試みたが、本稿はそれを自己批判的に修正しつつ、その修正自体がライトのこの小説が要請しているものであることを（多少言い訳交じりに）示したい。

ではエンパシーとシンパシーがどのように異なるかを少しばかり見てみよう。例えば、英英辞典の記述をきざはしにその差異を説明しようとするブレイディみかこによれば、

シンパシーはかわいそうだと思う相手や共鳴する相手に対する心の動きや理解やそれに基づく行動であり、エンパシーは別にかわいそうだとも思わない相手や必ずしも同じ意見や考えを持っていない相手に対して、その人の立場だったら自分はどうかと想像してみる知的作業と言える。（ブレイディ 14）

と、エンパシーをより知的作業的な側面が大きいもの、シンパシーをより身体反動的なもの、として区別しつつ、彼女の著書を読めば分かるように、全体として前者の利点（理解の正確性や知的強度）を後者の問題点（拙速さや欺瞞性）に引き付けて考察を繰り返している。あるいは、前々稿でも紹介した心理学者ローレン・ウィスペを再びひけば、“*empathy is a way of ‘knowing.’ Sympathy is a way of ‘relating’*” (Wispe 318) とされ、こちらもエンパシーが知的作業で意識的努力が必要なものであるのに対し、シンパシーがより感情的働きかけの面が強調される区分けになっている。

このような、エンパシーを知性や理性に、シンパシーを感情や身体に近づけて画定する定義にだいたいのところ寄りかかりながら、前々稿では、「黒人登場人物の生を類的に「かわいそうな弱者」という一元的なステレオタイプに押し込めつつ、自らの構造的な人種差への加担を自覚しないまま、伝統的な悲劇のカタストロフィ的効果の涙で自らの無意識的な罪悪感を浄化してしまう、人種主義的な感情としてシンパシー」（田島「再読 (I)」23-24）を批判するエッセイ「いかにして『ビガー』は生まれたのか」から読み取れる作者ライトの *NS* における企図として、「苛烈な人種差別的な状況を生きる黒人主人公の物語を読んで、シンパシーの憐みの涙をかきたたせるよりも、その黒人主人公の苛烈な状況とその心理をそっくりそのまま追体験させるエンパシーを抱かせたい」（同上 24）というエンパシー戦略を取り出したのだった。そしてこの「シンパシー」を排して「エンパシー」を希求する文学的傾向性を、メーガン・マリー・ハモンドの論に依拠して、モダニズム文学の一潮流と位置づけ、*NS* のモダニ

ズム性を示唆したのだった。

事実、*NS*のテキスト上においては、「シンパシー (sympathy)」の語は、同義語の「コンパッション (compassion)」や「憐み (pity)」とともに、ほとんど常に否定的文脈——「かわいそうな弱者」に拙速な感情的反応をすることが否定的なふるまいなのであれば——であらわれている。少なくとも、ことビガーに関しては、彼は常に他者からの「シンパシー」や「コンパッション」や「憐み」に対して、かならず忌避や嫌悪の反応をすることを忘れない。なるほど、作者ライトが読者に対して自分の物語の黒人登場人物にシンパシー的反応をしてほしくない創作企図上の理由（「黒人登場人物の生を類的に「かわいそうな弱者」という一元的なステレオタイプに押し込めつつ、自らの構造的人種差への加担を自覚しないまま、伝統的な悲劇のカタストロフィの効果の涙で自らの無意識的な罪悪感を浄化してしまう、人種主義的な感情」であるため）は、20世紀前半の黒人作家が置かれた人種政治状況を大雑把にでも知っていれば、十分に納得できる。しかしながら、なぜ彼の登場人物である（が作家ではない）ビガーがこの感情を忌避し嫌悪するのかの理由は、作者のそれと全く同じであるはずではなく、似ているとしても異なる動機から説明されなければいけないだろう。（あるいは、作者のシンパシー忌避の本当の理由こそビガーと同じであり、そこに上記の創作企図上の人種政治的理由づけが重ねられている、と考えてもよい。）その説明のカギとなるのが、先述した「人間性」である。

ビガーが自分に向けられるシンパシーをほとんど反射的に忌避するのは、その感情が、往々にして、対象の理解を属性やステレオタイプや集団の特性などの一般論的指標に頼り切り、対象をひとりの人間として捉えることを忘れさせてしまい、対象の個性や個人性——つまりは「人間性」——をないがしろにするからである。ドルトン夫妻の人種主義は正事業が現実を見ていないの外れで偽善的なものであることをマックスから咎められるシーン（273-274）はその好例だろう。だが、シンパシーという感情が、より身体的で感情的傾向が強く、カテゴリー的理解——特に弱者とカテゴライズされる対象に対して——を手掛かりに相手に歩み寄るきらいがあるため、確かに対象の「人間性」をないがしろにしやすいという傾向があるにしても、必ずそうなるとは限らない。逆に言えば、対象の「人間性」を尊重している（しようとしている）限りは、シンパシーに問題はないどころか、それは我われの日常的な人間的交流の基盤となるべき感情に他ならない。シンパシーは目の前の対象人物を一般論的理解にしか回収できないという理解こそ一般論的理解でしかない。さらに、同様のことはエンパシーにも当てはまる。つまり、エンパシーだから常にシンパシーよりもよりも良いということはなく、エンパシーという感情も対象人物の個別性や

個人的事情をないがしろにする場合は一般論的理解に墮し、簡単にステレオタイプの把握や偏見につながりうる。前々稿ですでに論じたが、Book I で、ペギーがビガーに寄せる安易なエンパシー（58）がその好例である。<sup>10</sup>

ビガーが他者から望んでいるのはエンパシーでありシンパシーは忌避している、のではない。おそらくビガー自身もそのように誤解しているのかもしれないが、自身の主体性や個性の獲得を欲している彼が実のところ（自分でも気づくことなく）求めているのは、彼の個性や個人的事情、個人的な感情や思考の手触りを尊重してくれるタイプのエンパシーであり、そのような個別なエンパシーでの互酬的やり取りである。そしてそのような互酬的な段階のエンパシーは、往々にして、シンパシーと見分けがつかない部分が多い。例えば、先ほど見たジャンの告白のシーンにおけるジャンのビガーに対する感情的態度を見ても明らかだが、互酬的エンパシーが極まっているとき、どこまでがシンパシーでどこからがエンパシーかを峻別することに、それほど生産的な——あるいは倫理道徳的に有意義な——論点はないと言ってよく、峻別の知的作業に拘泥しすぎると、生産的どころか、目の前で傷ついている個人に対する人間的で自然なシンパシーの発露を盲目的に阻害する公算が大きいという意味で、害悪的や欺瞞的にすらなりうる。その際、問題となるべきなのは、エンパシーかシンパシーかという感情のラベルの違いではなく、それが対象の個性を見ているかそうでないかという点である。もちろん、（本稿も含め）それが感情の単なる実践ではなく何らかの「研究」であり、感情の概念や理論の策定にかかわるのであれば、「個性」や「人間性」という手あかのついた概念装置は使い勝手が悪くそのまま論点に組み入れるのは困難であるのかもしれないが、それでも、エンパシーやシンパシーの概念や理論を考えるのであれば、少なくともその感情の対象が単数形か複数形か——つまり個人か集団か——について区分けして考察することは、決して見過ごせない重要な論点だと思われる。

感情は、意識的に輪郭を確定しその内包や外延を見渡せるような「概念」でもないし、結果が残り完了しうる（ので後から自分や他者が検討できる）ような「行為」とも異なるし、発揮したいときや求められたときに自発的にとりうる「態度」や「姿勢」とも異なる。感情は、常に移ろい変化してゆく刹那的なものであり、そこに難しさがある。愛は憎しみと表裏一体だ、というテーゼは昔から説かれてきたであろう人々の知恵だし、憧れと嫉妬にも同じことが当てはまる。感情の主体がいくら気をつけていたって、ふとしたきっかけで片方からもう片方の感情に変化してしまう。エンパシーやシンパシーもこのような感情ないしは感情構造のひとつだとすると、エンパシーとシンパシーは、愛と憎しみや憧れと嫉妬ほどにもお互いの間に違いがないのは間違いない。エンパシ

一とシンパシーは片方からもう片方の感情に簡単に変化してしまうし、双方が絡み合ったかたちで同時に発現してしまうこともよくあることだろう。ただし、こう言っているからといって、なにもエンパシーとシンパシーを知的に峻別することが学問や研究の面で無駄だと言っているわけではない。現に、21世紀の今日、そのふたつの感情は意義のある程度に概念的には分離ないしは分化してしまっており、その違いを丁寧に見定めることで見えてくるものもたくさんある。しかしそもそも（少なくとも英語圏では）エンパシーという語は1900年代に造語された美学的な学術用語であり、それ以前は、シンパシーの語が現代におけるエンパシーの意味を（現代におけるシンパシーの意味とあわせて）担っていた。詳述に検討する紙面的余裕も勉強量も足りないがそれでも概要的に言えば、19世紀末から20世紀の初頭にかけて、その（おそらく複合的な）動機はどうか、現代におけるエンパシーの意味内容はシンパシーから人工的に（そして美学的に／学術的に）切り離されることが求められたということだ。この切り離しの歴史的な文脈は複数的で複雑だが、少なくとも文学、なかでもこと小説分野においては、シンパシーからエンパシーを切り出して他者理解における前者の前時代的課題（ロマン主義・感傷主義・心理的リアリズム）を後者の新規性で乗り越える語りの実験的試みが、「文学モダニズムの勃興と軌を一にして」（Hammond 3）いたことは前々稿で述べた。

このような文脈を意識すると、もともとシンパシーというひとつの語のもとに包摂されていた概念をエンパシーとシンパシーという二つの語に無理やり切り分けて、シンパシーの意義を格下げするのと引き換えにエンパシーの意義を（不当に）格上げすることで、あるいはその切り分けに躍起になるあまりそもそもその切り分けの勘所を見失ってしまうことで、切り分けたはずのエンパシー自体がそれ自体では成り立たず機能不全を起こしてしまう事態を、「エンパシーのモダニズム的陥穽」と呼んでもよいと思われる。本作におけるその「勘所」とはここまで論じてきた「人間性」の把握であり、「機能不全」とは「人間性」の取り逃がしである。とするならば、本作における「エンパシーのモダニズム的陥穽」とは、シンパシーの直情的でカテゴリー的把握を極度に避け、エンパシーの理知的で文脈尊重的な対象理解を目指すあまり、対象の個別性を見失ってしまうことを意味する。

であるとすると、（重要なマックスとビガーの対話のシーンの検討をすっ飛ばして）先に結論を言ってしまうえば、Book IIIの中でもかなり特異なマックスの演説は、この「エンパシーのモダニズム的陥穽」に陥ってしまっているがゆえにビガーに響かず、その意味において失敗している、と言うことができる。この言い方がマックスの誠意ある弁論に対してあまりに不当に感じるならば、

公的・社会的な「法」が支配している言説空間において、そもそも一対一のエンパシー的な「人間性」の把握を目指すこと自体が形式上無理があるので、マックスの弁論はそもそも失敗を運命づけられていた、と少しメタ的に捉えてもよい。失敗することがあらかじめわかっているからこそ、作者ライトはこれほど雄弁に長々とマックスに語るのを許した（そしてその過程でエンパシー以外のテーマやテーゼを心ゆくだけ展開させえた）のだ、と。どちらにしる、マックスの弁論をエンパシー的な試みの失敗と捉えることで見えるのは、同じように失敗しているバックリーの弁論との比較である。バックリーの差別主義的弁論がエンパシー的に成功しているわけがないことはそれほど見えにくい事態ではないだろうが、バックリーの過ちはマックスの弁論の過ちを異なる立場からだが繰り返すかたちで並置されており、法廷的に両者は対立してはいるが、ことエンパシー的な文脈においては、バックリーの弁論もマックスの弁論も、同じ轍を踏んでいることがテキスト的に体現されていて、この小説の結末のための重要な前フリになっている。

まずはマックスの弁論を先に見てみよう。マックスはまず、バックリーの弁論が、ビガーが「なぜ」殺したのかという動機について説明できておらず、それを感情に流された人びとが立ち止まって考える前に急いで判決を下してしまおうとする拙速な議論であると指摘し、いわばこの裁判プロセスの全体にわたるネガティブ・ケイパビリティの欠如をあげつらう。(348-349) 弁論が始まると、マックスはまず真っ先に、自分の弁がビガーへのシンパシーを誘うためのものではないことを取り立てて強調し、ビガーの個別的な生の在り方を——つまり「人間性」を——エンパシー的に見ることを法廷に求める：

“Allow me, Your Honor, before I proceed to cast blame and ask for mercy, to state emphatically that I do *not* claim that this boy is a victim of injustice, nor do I ask that this Court be sympathetic with him. That is not my object in embracing his character and his cause. It is not to tell you only of suffering that I stand here today, even though there are frequent lynchings and floggings of Negroes throughout the country. If you react only to that part of what I say, then you, too, are caught as much as he in the mire of blind emotion, and this vicious game will roll on, like a bloody river to a bloodier sea. Let us banish from our minds the thought that this is an unfortunate victim of injustice. ... (略)

“Rather, I plead with you to see a mode of *life* in our midst, a mode of life stunted and distorted, but possessing its own laws and claims, an existence

of men growing out of the soil prepared by the collective but blind will of a hundred million people. I beg you to recognize human life draped in a form and guise alien to ours, but springing from a soil plowed and sown by all our hands. ... (358 強調は原文)

マックスは、ビガーは憐れむべき「不正義の犠牲者」ではないことを強調し、「彼へのシンパシーを感じる」ことは求めていないし弁論の目的でもないを重ねて主張する。ビガーを犠牲者と捉えるシンパシー的反応は「盲目的な感情のぬかるみ」に嵌まり理性的な判断を奪うこととして、忌避されるべきことが求められる。直情的なシンパシーではなく、むしろ、「それ独自のルールや言い分をもった」ビガーの「生の様態」をみることを求めており、これはエンパシー的想像力の発揮を求めていることと同義であろう。このように、マックスの弁論は、作者の構えと同じように、いわば、エンパシーのモダニズムの切り分けを聞き手に求める戦略を採っている。そして、エンパシーに必要な基盤的共通性の確保として、マックスはビガーの生のプロセス（罪に至った経緯）をアメリカ建国神話の罪深いプロセスを下敷きに張り合わせながら語り、「人間性」に訴えるよりはむしろ）国民的な想像の共同体を取り繕おうと——すなわち「アメリカという国が生んだ息子（Native Son）」として提示しよう——画策する。つまり、白人社会からは人間として扱われていないビガーを同じアメリカ人として、余りにもアメリカ人らしいアメリカ人として提示することで国民化＝人間化し、なんとか白人たちのエンパシー的想像力の取りつく島を作り上げようとする：“I would be appealing to men bound by common ideals to judge with pity and understanding one of their brothers who erred and fell in the struggle.” (357)

このマックスの企図自体は、それほど問題のあるものではない。ステレオタイプ的な理解しかもたらさない直情的なシンパシーという感情を切り離して棄却し、ビガーの生とその文脈を見るエンパシーを駆動させるために愛国心的な想像力の地平に「人間性」を打ち立てようとする事自体には、それなりの戦略的有効性はあるし、そもそも作者ライトの創作上の戦略と軌を一にしている。

しかしながら、ジョセフ・T・スカレット・ジュニアが論じるように、“Max, for all this good will, has never really seen Bigger’s individual humanity.” (Skerrett 38) と言える。思い返してみれば、そもそも弁論の始めで、マックスは“My plea is for more than one man and one people.” (354) と訴えていることから察せられるように、共産党員の弁護士として、ビガーをひとりの個

人として捉えるよりも、むしろ、ビガーをビガー自身以上の存在として拡大的に捉えている：“If I can make the people of this country understand why this boy acted like he did, I’ll be doing more than defending him.” (271) と意気込んだり、“Well, this thing’s bigger than you, son. In a certain sense, every Negro in America’s on trial out there today.” (340) とビガーに言ってしまうたりする。弁論のなかでも、白人聴衆にビガーの置かれた社会・政治的文脈を説明するに及んで、ビガーをひとり人間ではなく「象徴 (symbol)」として提示してしまう：

This man is *different*, even though his crime differs from similar crimes only in degree. The complex forces of society have isolated here for us a symbol, a test symbol. The prejudices of men have stained this symbol, like a germ stained for examination under the microscope. The unremitting hate of men has given us a psychological distance that will enable us to see this tiny social symbol in relation to our whole sick social organism. (354 強調は原文)

マックスの弁論には、クリストファー・ダグラスが指摘するように、1930年代この小説執筆当時作者ライトが傾倒していた(第二世代)シカゴ学派社会学の影響が容易に見てとれる。<sup>11</sup> 「環境決定論」的な都市社会(シカゴ)の視点がシカゴ学派社会学の顕著な特徴であり、ダグラスが言うように、“Max’s social science diagnosis of Bigger’s crime emphasizes the importance of environment in Bigger’s development and eventual crimes.” (Douglas 185) である。確かに、再びダグラスの言う通り、ビガーの生の説明としてマックスが持ち出す「環境決定論」は、バックリーが持ち出す遺伝主義的な人種主義的説明の有効な批判となっている。(Douglas 186) しかしながら、おそらく余りにもシカゴ学派社会学の「環境決定論」的な説明に肩入れしすぎてしまったがゆえに、すなわち社会＝環境的な悪の追求に力が入りすぎてしまったがために、マックスは次第にビガーをひとり人間として捉え損ね始めたのだろう。事実彼は、“This boy represents but a tiny aspect of a problem whose reality sprawls over a third of this nation.” (361) とビガーは社会問題のたかだか一例でしかないように口走ったり、しまいには “This is the case of a man’s mistaking a whole race of men as a part of the natural structure of the universe and of his acting toward them, accordingly. He murdered Mary Dalton accidentally, without thinking, without plan, without conscious

motive.”(364) と、社会環境要因をあまりに強調したいがために、ビガーの殺人を極限までに矮小化し、ビガーの内面すらもそれに従って矮小化してしまっている。

なにも、マックスがここで言っていることが完全に間違っていると言っているのではない。三人称の語り手によってビガーの内面に入り込みながら Book I を読んできた読者であれば、ビガーがマックスの言うように白人の世界を世界のすべてと信じ込んだりほとんど何も考えずにパニック的にメアリーを殺してしまったりしたことは分かっている。しかしながら同時に、我われ読者はビガーが殺人という自分の行為について自分なりの意味と経験を自分なりに見出そうとしている、すなわち、個人的な感触を備えた経験として捉えておりそれが今や彼のアイデンティティの大きな一部をなしてしまっていることも知っている：[Bigger] hated this; if anything could be done in his behalf, he himself wanted to do it; not others. The more he saw others exerting themselves, the emptier he felt. (272) エンパシーのモダニズムの陥穽に陥ったマックスの弁論をビガーとともに聞かせられる我われ読者は、そこではビガーがひとりの個人としては語られていないことに気づいてしまう。マックスはつまり、アメリカの社会的な悪を追及するのと引き換えに、ビガーの悪の個人的な側面をないがしろにしてしまっており、現実世界ではそれはそういうものかもしれないが、やはり小説的にはビガーへのエンパシーの個別性がかなぐり捨てられてしまっている点は失着だと言わざるを得ない。

奇妙なことに、この点において、マックスはバックリーとそれほど差があるわけではない。バックリーの人種主義をあまりに悪魔化すると見えてこなくなってしまうが、バックリーとマックスは立ち位置が違うだけで、エンパシー戦略(の失敗)的には、二人はかなり近づいているとすら言える。バックリーがビガーの「人間性」を認めているとは決して言えないが、(少なくともかたちだけは)エンパシー的にふるまっていることは確かである：

“I know how you feel, boy. You're colored and you feel that you haven't had a square deal, don't you?” the man's voice came low and soft; and Bigger, listening, hated him for telling him what he knew was true. He rested his tired head against the steel bars and wondered how was it possible for this man to know so much about him and yet be so bitterly against him. “Maybe you've been brooding about this color question a long time, hunh, boy?” the man's voice continued low and soft. “Maybe you think I don't understand? But I do, I know how it feels to walk along the streets

like other people, dressed like them, talking like them, and yet excluded for no reason except that you're black. I know your people. Why, they give me votes out there on the South Side every election. I once talked to a colored boy who raped and killed a woman, just like you raped and killed Mrs. Clinton's sister. . . .”

“I didn't do it!” Bigger screamed. (286)

選挙で黒人票を集めているという以上、(少なくとも表面用は)完全に人種主義的なふるまいを常日頃していることはあり得ず、逆に市井の黒人の声を拾い上げていられるかもしれないし、地方検事という立場上、ビガーの余罪を追及している(が、証拠が出ないので法廷では言及していない)ことから明らかなように、貧困や生活環境などが原因で犯罪を起こしてしまう黒人たちの事件をこれまでいくつも扱ってきただろう。ビガーに「お前の気持ちはわかるよ」と(少なくともかたちのうえでは)エンパシー的に語りかけるバックリーは、ある程度まで黒人の被差別意識を理解しており、ビガーもそれを認めている。バックリーに欠けているのはエンパシーではなく、ビガーをひとりの個人として把握する理解の仕方であり、それは“Just a scared colored boy from Mississippi.”(288)とビガーを単なる典型例として(皮肉にも正確に)短評する言葉にも明らかである。

しかも、バックリーが召喚する多すぎる証人たちの声(350-352)は、テキスト上にはわざわざすべて書き起こされないものの読みうる限りにおいては、Book I と Book II をビガーの目を通して読んできた読者ならば非常に喚起的に思い出せる細部をかなりの部分で再現(語り直し)してくれているように読める。つまり、バックリーが呼び問いただす多すぎる証人たちの証言は、取捨選択的というよりはかなり網羅的で、人種的・政治的な偏向があるというよりは、マックスの「環境決定論」的な語りとは別の意味で、ビガーを取り巻く環境(人びと)から事実を丁寧に積み上げてビガーという存在を法廷に理解させようとしている、と言える。その証言に基づいているであろうバックリーによるビガーについてのエンパシー的(ビガーへの内的焦点的)語り(374-387)は、遺伝学的人種主義的の偏向は疑いえないものの、マックスのエンパシー的ビガーの再構成語りに欠けているメアリーの死体隠匿の動機すらそれなりの迫力をもって説明できてしまっており、(内容の真偽は別として)語りとしてはエンパシー的の語りを達成してしまっている。

加えて、バックリーはマックスと同じように、ビガーに対するシンパシー的の言説が場を支配しないよう非常に気を払っている。バックリーは、法の裁きが

感傷性やシンパシーにおぼれて揺らがないように要所所で釘を刺し（346、347 など）ながら、マックスがビガーを愛称で呼んだりする行為をシンパシーを掻き立てるための戦略だと喝破したり（347）、マックスの弁論を「シンパシーを誘う猫かぶりの呼びかけ」（the specious call for sympathy）」（372）であると非難したり、真にシンパシーを向けられるのは犯罪におびえる一般市民（372）や被害者家族（347）だと明言したりして、ビガーへシンパシーが及ばないように予防線を張っている。

このように、この小説は、マックスとバックリーの双方ともに、エンパシーのモダニズム的陥穽に陥っていることをテキスト的に露呈させる。双方異なる動機からだが、ビガーへのシンパシーを切り捨て、ビガーの内面をエンパシー的に取り出して見せることが企図されているが、これまた異なる経路を経て、双方ともにビガーをひとりの人間として扱うことに失敗している。マックスとバックリーは、立場や動機、その思考プロセスは全く異なるが、エンパシーの詩学的にはコントラストをなし、双方揃って同じように失敗することでこの小説の結末部での問題を黙説法的に浮かび上がらせる。それがビガーにおけるエンパシーと個別性の問題であり、エンパシーと表現意欲の問題——すなわち作者のエンパシーの問題——ということになるのだが、その点については次稿に引き継ぐことにしよう。

## 注

1. 本稿は、拙著論文「リチャード・ライト『アメリカの息子』再読（I）——『アメリカの息子』におけるエンパシーの検討」とその続きの拙稿『『アメリカの息子』再読（II）』を承けたものである。また、本稿は科学研究費助成事業「20世紀アフリカ系アメリカ文学におけるエンパシーの表象戦略」（JP20K12961）の研究成果の一部である。
2. 拙稿『『アメリカの息子』再読（II）』の第3.6節を参照。
3. 前稿・前々稿と同じく、NSからの引用はページ数のみ記す。死後出版の無削除版ではなく1940年版を使う理由も、前稿・前々稿のときと同じである。
4. ヌスbaumは（少なくとも、感情に関する彼女の倫理哲学理論を体系的にまとめた *Upheavals of Thoughts* においては）他者の経験を再構成するエンパシーを（文脈によって善にも悪にも転ずるので）ほぼ倫理的には「価値中立的（neutral）」なものとして扱い、彼女が最も価値を置く「思いやり（compassion）」にとってエンパシーは必要条件でも十分条件でもないことを論じている。エンパシーにおいては前提として他者の人間性を認めることになるという点だけが、エンパシーの「価値中立的」な性質の例外として論じられている。上記を含むエンパシーと「思いやり」の関係については Nussbaum 第6章を参

## リチャード・ライト『アメリカの息子』再読 (III)

- 照。また、拙著「小説のエンパシー理論 II」の 50-52 頁も参照。
5. この部分 (ブロック引用の最後の部分) は、現実の他者相手についても当てはまるようでもあるし、オートリーが示唆するように、フィクションにしか当てはまらないかもしれないし、じつは考えてみるととても厄介な問題なのだが、管見のかぎり、この問題について現実の他者にかかわるエンパシーに関連付けて十分に考察した現代のエンパシー理論は見つからなかった。フィクションのエンパシーについてはオートリーの見立ての通りで問題はない (つまり、フィクションの方が話は簡単な) のだが、これが現実存在する他者に対するエンパシーの場合、エンパシーの主体が感じているシミュレーション的感情の所有者は、果たして主体のもの (感情はそれを実際に感じている者に帰属するクオリア的なもの) なのか対象他者のもの (主体が経験しているこのシミュレーション的感情は、少なくとも頭では、他者に所有権があるもの; そうでなければ単なる感情感染に墮してしまうだろう) なのかは、とても難しい問題である。本稿ではこの件は深入りしないこととする。
  6. 拙稿『『アメリカの息子』再読 (II)』の第 3.1 節を参照。引用は同 3 頁より。
  7. ここで「奇跡的」という形容を試みたのは、ジャンのエンパシー的なものの分かりの良さ と雄弁さが (リアリズム的には) かなり唐突ででき過ぎている (ので多少嘘くさい) ようにも感じられるからだ。ただし、本稿の文脈では、このジャンの理想的エンパシーが、主にのちに来るマックスのそれに対するメルクマールとして詩学的に働くことを (次稿で) 議論するので、その意味で「理想」は「奇跡的」にでき過ぎていてもとりあえずは問題ない、とする。
  8. 拙稿『『アメリカの息子』再読 (I)』の第 2 節を参照。
  9. 詳しくは「小説のエンパシー理論 I」26-27 頁を参照。
  10. 前々稿『『アメリカの息子』再読 (I)』32-33 頁を参照。
  11. Douglas 185-187 および 189-190 を参照。

## 引用文献

- Douglas, Christopher. "Chicago Sociology." *Richard Wright in Context*, edited by Michael Nowlin, Cambridge UP, 2021, pp. 185-195 (Chapter 17).
- Hammond, Meghan Marie. *Empathy and the Psychology of Literary Modernism*. Edinburgh UP, 2014.
- Lanzoni, Susan. *Empathy: A History*. Yale UP, 2018.
- Nussbaum, Martha C. *Upheavals of Thought*. Cambridge UP, 2001.
- Oatley, Keith. *The Passionate Muse: Exploring Emotion in Stories*. Oxford UP, 2012.
- Skerrett, Joseph T., Jr., "Composing Bigger: Wright and the Making of Native Son." *Richard Wright: A Collection of Critical Essays*, edited by Arnold Rampersad, Prentice

Hall, 1995, pp. 26-39.

Wispe, Lauren. "The Distinction between Sympathy and Empathy: To Call forth a Concept, a Word Is Needed." *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 50, No. 2, 1986, pp. 314-321.

Wright, Richard. *Native Son*. Abridged Edition: The Original 1940 Text, Harper Perennial, 2001.

田島健太郎「小説のエンパシー理論 I—文学研究におけるエンパシー研究概観と Amy Coplan によるエンパシー離村の検討を中心に」*Philologia* 第 50 号、三重大学英語研究会、2019 年、19-43 頁。

—。「小説のエンパシー理論序説 (I) —物語エンパシーのカテゴリー分け」*Philologia* 第 51 号、三重大学英語研究会、2020 年、63-88 頁。

—。「小説のエンパシー理論 II—Martha C. Nussbaum のエンパシー理論の検討」*Philologia* 第 52 号、三重大学英語研究会、2021 年、31-57 頁。

—。「リチャード・ライト『アメリカの息子』再読 (I) —『アメリカの息子』におけるエンパシーの検討」*Philologia* 第 53 号、三重大学英語研究会、2022 年、21-40 頁。

—。「リチャード・ライト『アメリカの息子』再読 (II) —『アメリカの息子』におけるエンパシーの検討」*Philologia* 第 54 号、三重大学英語研究会、2023 年、1-29 頁。

帯木蓬生『ネガティブ・ケイバビリティ: 答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版、2017 年。

平石貴樹『アメリカ文学史』松柏社、2010 年。

ブレイディみかこ『他者の靴を履く—アナーキック・エンパシーのすすめ』文藝春秋、2021 年。